▼お申込み・お問い合わせは電話かFAXかメールでラコルタまで。

電話:06-6155-3167 FAX:06-6833-9851 メール:info@suita-koueki.org

19_H

23₈

31₈

遊ばなくなったおもちゃの交換と様々な

ワークショップ体験。

●とき:13:00~16:00 ●対象:こども 200

●会場:千里ニュータウンプラザ



30₈ (水)/

ハザードマップなどの地図を見ながら、どのような 行動を取れば良いかを考えます

●とき: 19:00~21:00 ●定員:先着15名

税金のことなどをわかりやすく説明します。

●とき: 14:00~16:00 ●定員: 先着20名



事例を聞きながら吹田市の補助金の活用に ついて学びます。

●とき: ①14:00~16:00 ②19:00~21:00 ●定員:先着20名 ①②とも同じ内容です。

障がい者の方々のアート作品やオリジナル雑貨などを 一堂に展示いたします

●3月16日(水)~27日(日) ●会場:ラコルタ <24日・25日、13:00~15:00は販売もあります。> 主催:NPO法人 ホッと

自分にあったボランティア活動を見つけませんか? 月

- ●3月13日(日) 遵13:30~15:0010名
- ●4月19日(火) (水)19:00~20:30
- ●5月18日(水) (瀬) 10:30~12:00



ご使用における一部変更について

市民公益活動団体の皆さんへ吹田市からのお知らせ

①ラコルタにおける市民公益活動団体に対する5割減額の適用は

平成28年3月31日支払分まで となります。

お知らせです。 必ず読んでね!

②市民公益活動団体・社会教育関係団体が、メイシアター大・中ホールを 使用するとき、5割減額の適用は 平成28年2月使用分から となりました。 (減額条件有)



"あなたの寄附で市民公益活動を活発に!"

みんなで支えるまちづくり基金の寄附にご協力をお願いします。 (ふるさと納税が適用されます)

●詳細などのお問い合せは、 吹田市役所 地域自治推進室まで 電話:06-6384-1326

※連載、「私たちの団体・私たちの活動」市民公益活動団体インタビューは今回はお休みします。

の方や家事・勉学に忙 しい方などに、週末や

余暇の新しい過ごし方として、「短 時間でできる(ぷち)ボランティア 活動」のプログラムを提供します。

ラコルタが 行うイベン トや活動を応援し、ボ ランティアとしてお手 伝いいただきます。



↑ 詳しくはWebで

ル」です。一旦は不必要とされたモノが、 人の手とアイディアによって、新たな地域 の交流を生み出します。将来世代も幸せ に暮らせる「持続可能な社会づくり」には このような取り組みも大切なのかもしれ (柳瀬)

〈発行責任者>柳瀨真佐子 〈編集スタッフ〉茨木由美・伊富貴順一・ 鍵谷誠一・佐藤和男・中井まり・春貴勇力



〒565-0862 吹田市津雲台1丁目2番1号 千里ニュータウンプラザ6階 TEL 06-6155-3167 FAX 06-6833-9851 Eメール info@suita-koueki.org ホームページ http://suita-koueki.org

指定管理者 NPO 法人 市民ネットすいた

ラコルタへのアクセス 阪急電車千里線「南千里駅」改札出て左、千里ニュータウンプラザ6階





吹田市立市民公益活動センター

ラゴルタのココに注目! 本号は・・・ あれから5年 関大生が出会った 「復興への思い」

1月28日(木) 第3回 市民公益活動団体の社交場「シェアねん!

ラコルタでは、今年度、市民協働学習センターとの共 催で、市民公益活動団体の社交場として、様々な分野 の団体がお悩みを共有したり、情報交流を図る団体交 流会を開催してきました。第3回目は事業者や地縁団 体と連携した地域貢献活動の事例発表をしました。

後半は、発表者を交えながら交流会を行い、最後に各 団体の想いを「漢字一字」で表現してもらう書初めを 行いました。参加者からは、「つながりが欲しいと



思っていた。こういう場を提供していただけることに感謝」「今日の話題提供者のお話しは、新鮮さを感 じるもので良かった」といった感想が出ました。各団体の想いは様々ですが、漢字の熟語のように色々な 組み合わせや結びつきの中で、新しい活動が生まれていけば良いなと感じました。

1月31日(日)

ーナリスト西谷文

し、約70名のご参加があ

会 りました。中東地域(今回は主に アフガニスタンとシリア)で撮影された映像を 基に、現在起こっている戦争の状況やその影響 について、お話しいただきました。参加者から は「テレビや新聞を見るだけでは分からないこ 面で自分たちの生活につながっていると感じ た」等の感想が寄せられました。世界の現状を 知り、すべての人が尊重され、安心して暮らせ る「多文化共生」社会を目指して、日本にいる 私たちも、中東地域で生活する方々に関心を持

っ ち続けることが 大切というメッ セージをいただ きました。

朷

曲

吹田市職員時代の エピソードも交えての講



各地で新しい地域の(2月13日(土) 枠組みが検討さ れ、住民組織だけでなく、

じめている。その中で、これか

らの地域づくりの先進事例として各方 () 面で注目を浴びている、大阪市鶴見区 にある「NPO法人榎本地域活動協議 会」を訪問し、地縁組織の運営、これ からの在り方について学んで来まし た。自治会をはじめ、地域で活動され ている若手の皆さんからは、多様な立 場や世代の関わりづくりだけでなく、 自立した地域運営をめざす、「事業型 地縁組織」が取り組む地域自治の姿も また新鮮に映ったようでした。



ラコルタの ココに注目! 本号は・・・

あれから5年

関大生が出会った「復興への思い」

関西大学社会学部の古川ゼミでは、「3.11以降の日本社会を考える」をテーマに、原発事故以降の社会について学生たちが福島県での研究活動を行っている。

「福島のことを他人事にしない」

PHOTO REPORT III内ピサby福島大学

福島大学の学生が 地元の野菜を使ったピザを販売



古川ゼミの学生たちより

吉川さんが行う現地ガイドの特長は避難生活者と原発作業員の 視点が含まれていることだ。Jヴィレッジという作業員宿舎では、 地元の復興を願いながら働いている人の声を聞くことができた。 昨年9月に避難指示が解除されたばかりの楢葉町では、

帰還した人のほとんどが65歳以上の高齢者で、帰還率は3%ほど。 現地での雇用が減ったことも影響し、過疎化が急速に進んでいる。

現地に行かないと知れないことがたくさんあった。

[福島のこと]で終わらせず[自分たちのこと]として、

これからもこの繋がりを大切にしていきたい。

担当教官からのコメント

社会学部 社会学科 社会学専攻 准教授 古川 誠さん

震災と原発事故から5年。復興しつつあるところ。事故以来いまだに放置されているところ。新しい福島をつくっていこうという取り組み。放射能による被害とそれへの不安。そしてそれらをめぐるさまざまな人々の意見と立場。福島の現実は震災後ではなく現在進行形の震災中といえるでしょう。

学生としてできることは限られていますが福島の現実に直面することが大事だと思います。

2011年3月11日(金)に発生した東日本大震災は、

死者・行方不明者数18,460人となり、戦後最悪の大規模災害となりました。

また、震災により起きた福島第一原子力発電所事故は、

広範囲にわたって放射能汚染をもたらしました。

震災直後は、避難所への支援物資や、瓦礫処理のボランティアなどが必要とされていましたが、 5年が経った今、当時とは違った関わり方が求められています。

本号では、震災直後から被災地に入り、継続的な支援に取り組んでいる 関西大学の古川ゼミ、長谷川ゼミの学生たちの活動をご紹介します。

彼らの取り組みは、「復興への思い」と向き合いながら途切れることなく後輩へと引き継がれ、 東日本大震災の風化に警鐘を鳴らしています。

> 関西大学商学部の長谷川ゼミでは、聞き手が話し手の 人生を丸ごと聞き、話し手自身の言葉で文章化する 「聞き書き」活動を行っている。

「同じ後悔をしてほしくない」

PHOTO REPORT

津波によって最上階部分のみが 取り残された団地



毎年参加している 「うごく七夕まつり」の様子

長谷川ゼミの学生たちより

「聞き書き」活動を行うきっかけとなったのが、岩手県陸前高田市 米崎小学校仮設住宅自治会長の佐藤一男さんだった。佐藤さんは、 避難所運営を務めた経験を活かし、講演会活動などを行っている。

陸前高田市は、全世帯の5割が津波によって被災、そのうち9割と なる3,801世帯が全壊であった。現地に入ったときに、カーナビに 表示される地図と、車窓から見える風景があまりにも違っており、 津波の恐ろしさを実感した。

一見すると、街の復興が進んでいるようだったが、「自分たちの望んでいる街ではない」と、佐藤さんが語った時の切ない目が 印象に残っている。

また、「自分たちと同じ後悔をしてほしくない」という佐藤さん の思いを受け止め、防災士の資格を取得した。

自然災害に備えようと呼びかけていきたい。

担当教官からのコメント

関西大学 商学部 商学科 准教授 長谷川 伸さん

ゼミ生たちは、311東日本大震災の被災地に生きる人々に1対1で向き合って「聞き書き」をしてきました。この「聞き書き」を通じて、学生たちは被災された方々と縁を結び、自らが暮らす地域の防災に目を向けるようになりました。